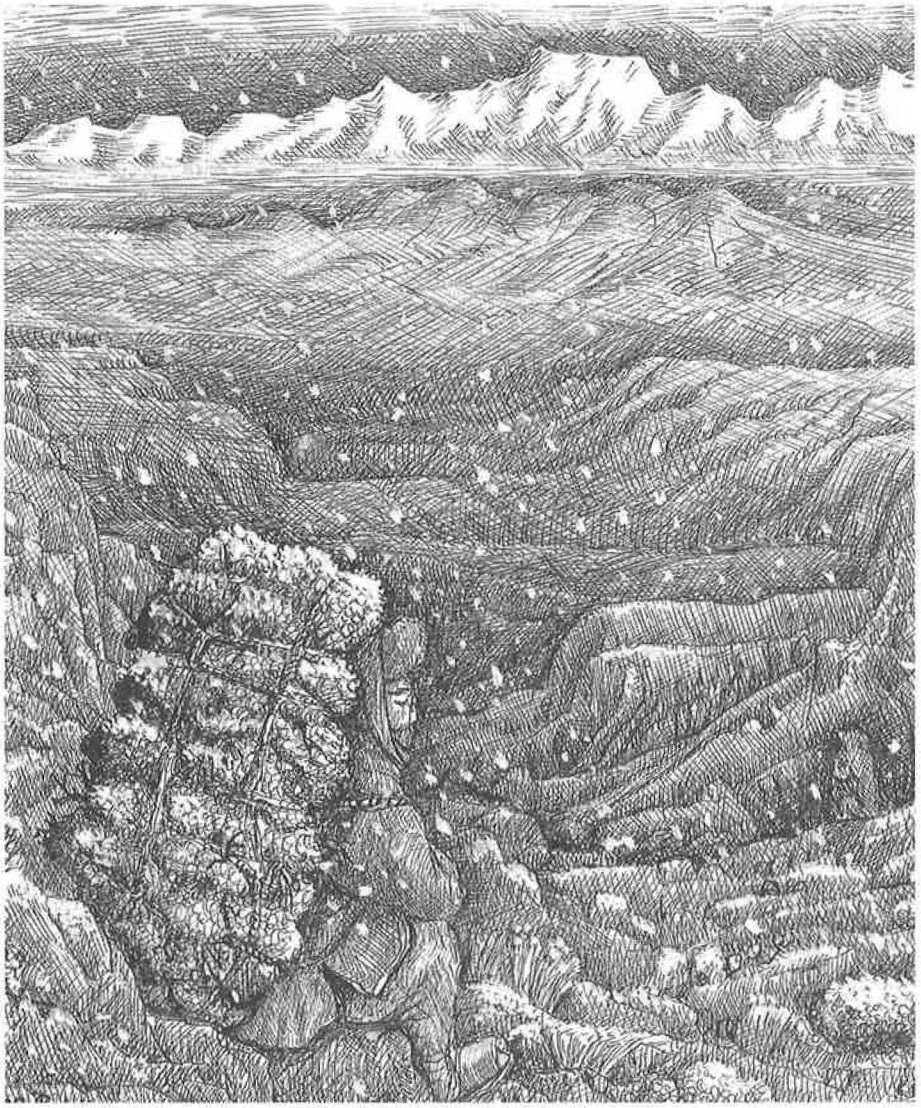
1998年12月16日

ペシャワール会報

No.58

ペシャワール会 〒810-0041 福岡市中央区大名一丁目一〇一二五 上村第二ビル三〇七号
電話 〇九二（七三一）二三七二
FAX 〇九二（七三一）二三七三



●世の様々な不安をよそに、現地事業は激刺と継続…… 中村　哲
●会計作業に四苦八苦の毎日です…… 藤井卓郎
●医師の間に活気が出てきました…… 小林　晃
●小さくとも、具体的な蓄積こそ大事…… 藤田千代子
●知識と現実のギャップを知った三カ月でした…… 堤　敦朗

水運び人足ハキム　＊表紙絵　甲斐大策

ペシャワール会は1983年９月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

ペシャワール会　インターネット
ホームページ　http : //www1. meshnet. or. jp/~ peshawar/
電子メール　peshawar @ mxb. meshnet. or. jp

●新病院への移転を終えて

世の様々な不安をよそに、現地事業は潑剌(はつらつ)と継続

PMS（ペシャワール会ジャパン・医療サービス）院長
JAMS（日本ーアフガン・医療サービス）顧問医師　中村　哲

「強制移転」開始！

お元気でしょうか。

今回の現地からのお知らせは、何と言っても新病院への移転のことです。

十一月三日、待ちに待った移転の決定が行われました。去る四月二十六日、五十余名の日本からの訪問団の列席の中、ペシャワール会病院の仮開院式が盛大に行われたことはご記憶のことと存じます。

しかし、物価高騰や政情不安に悩まされ、送金さえ一時困難となり、加えてのノロノロ工事、私だけではなく、スタッフたちの忍耐も限界に達しました。移転は、日本側では簡単に思えるかもしれませんが、ただの「移転」とは訳が違います。新体制の実現がこの一点にかかる局面です。延期を重ねれば、患者は治療の場を失い、スタッフの士気も低下し、プロジェクト全体に致命的な影響が出ます。しかし、九月下旬の予定が十月下旬となり、工事側はさらに延期を要求してきました。そこで、このままではプロジェクト自身が崩壊すると見て、過去二年間の神経戦に終止符を打つべく、ついに十一月一日、移転を通告、外来を停止して全スタッフを総動員、半ば「強制移転」に踏み切りました。

ただ実行あるのみ

十一月三日、全スタッフ八十余名は建築現場に殺到、自らの手で清掃を始め、必要備品をそろえるためにバザールを駆けめぐり、ガス・水道・電気なども点検・修理を行い、積年の恨みを晴らすように、朝から晩まで真っ黒になって働きました。

圧倒的な気迫に押された工事関係者は、残余工事を急ぎ始めましたが、建築を巡る騒動で疲れはてたハンフリー氏（元事務長）は既に退職、大げさに言えば、小生が戒厳令指揮官となり、「議論は無用。ただ指令の実行あるのみ」と述べ、まる一カ月間、文字通り寝食の時間も惜しんで新体制づくりに没頭しました。実に十五年目の一大転機、立つか倒れるかの瀬戸際だと思われたのです。

掃除人から医師に至るまで清掃に追われるころ、周辺の住民からの苦情の解決、配水設備の整備、ジェネレーターの点検、都市ガスの導入、警備体制の強化、輸送の手配、法的

完成したPMS病院での回診風景（右が中村医師）

手続き、電話の設置、雇用と解雇……目が覚めてから眠る直前まで、この状態が小生のうちにもう二度と来ないことを祈ります。

診療開始とともに患者が殺到

新病院は「市街区」にあるので、昼間の田園風景は心和みますが、これは知らぬが仏、実は事実上法秩序の及ばぬ所で、警察も手出しできません。移転直後、病院の門前で二名仇討ちをめぐる事件が起りました。川向こう百メートルとない交番は見て見ぬふりでした。

ラシュト診療所へ向かうPMSスタッフたち

おびえるスタッフが続出したので、鉄条網を敷地周辺にめぐらし、門衛を増員して自動小銃で武装、警備を固めました。また、PMS（ペシャワール会医療サービス）病院の分院であるJAMS（日本・アフガン医療サービス）と話し合い、スタッフの輸送も手配しました。

小林先生が新しい外来システムの実施や、薬の管理、新しく参加した研修医たちの指導に力を尽くしました。藤田婦長は、六十室以上もある部屋の鍵の管理、厨房・ガス・電気など建物管理に目を光らせ、余りの忙しさに一度はあわてて転倒、脳震盪を起こしました。会計担当の藤井さんは、矢継ぎ早に出される物品購入の仕訳でてんてこまい、深夜まで仕事に追われていました。

現地スタッフの非能率とチームワークのなさは、初めから分かっていたことですが、やはり危急の時はイライラするものです。日本では考えられないハプニングの続出、やっと外来を開けたのは、移転開始後三週間を経た十一月二十四日のことでした。それでも、この地では異例の組織されたチーム、周辺農村の住民の信頼は厚く、外来患者は三日目には百名を突破し、さらに増え続けています。

最も心配していたアフガン人・パキスタン人の間の紛争は皆無でした。新規雇用者の中にだけ、アフガン人の多いことをとやかく言う者がありましたが、即時解雇し、このことは特に念入りに全スタッフに徹底させております。

「無視された地域」へ

この引越騒ぎで余り目立ちませんでしたが、もう一つ特筆すべきは、三年をかけて踏査したパキスタンの最北端、ヤルクン川上流に活動範囲を拡大したことで、去る六月ワハン回廊をにらむ国境地帯に歩を進め、ラシュトという村に診療所建設を始めました。これも十月中旬までに基本部分を完成、常駐態勢を敷き、今年が初の越冬です。標高三四五〇メートル、まともに行けばペシャワールからジープで二日、さらに徒歩で二―三日の所ですから、夏に外国の登山者をまれに見るだけで、誰も来ません。

あえてこの場所を選んだのは、パミール高原の南部に当たるワハン回廊が、桁外れの山岳の無医地区、ハンセン病が多いとにらんでいる上に、ほとんど無視された地域だからです。彼らの唯一の薬品が鎮痛剤の代わりに用いられるアヘンですから、いかに貧しい医療事情か、想像できましょう。主としてワヒ族とタジク族が住み、ヤルクン川沿いにチトラール方面に人々が入ってきます。これは出稼ぎ、放牧の人々で、一週間、二週間歩いて

診療中の中村医師

やってきます。彼らはたいていラシュトあたりを通過しますから、将来に向けて充分な情報と住民との親交を深めることができます。

七月から診療部長のジア医師の指揮で悪戦苦闘、機材を搬送して、三カ月かかりました。この診療所建設に当たっては、三年間の準備期間を要し、面白い話もありますが割愛します。

十五年目の結論

かくて、世界中が不況・経済不安におびえるのを尻目に、多々苦労はありますが、はつらつと現地事業が進んでいるのは、不思議でもあり、幸せでもあります。

PMS病院の朝礼は毎朝八時、次のような建業精神の復唱で始まります。

一、我々は、貧しい患者への助けを通して神に仕える。
二、我々は、国籍・宗教と、あらゆる別(わ)け隔てを超えて協力する。
三、我々は、公私混同を厳しく避ける。
四、我々は、病院の職務規定に服従する。

簡潔すぎるかもしれませんが、これが十五年目の結論と方針です。「何をいまさら当然のことを」と思えますが、当然のことが当然でない、この世界。宗教と民族紛争が新聞の紙面を連日埋める中、これがバラバラになりがちな現地の、多様な人々を結び付ける共通の絆であり、掟でもあります。

現地では、こまごました話は通用しません。良いことも悪いことも、おおらかに分かりやすいのです。言葉で人を丸め込むことはできません。「事実を以て真実を語れ」。これが私たちのスローガンです。今年は、インド・パキスタンの原爆実験があり、アフガニスタンの騒乱あり、イラン・アフガニスタンの緊張あり、内外ともに大混乱のうちに経過しましたが、ひとつの大きな礎石がおかれた記念すべき年となりました。

すさんだ世の一服の清涼剤として、営々と事業を進めていきたいと存じます。

日本にあって我々の事業を支えてくれる良心的な人々に心から感謝しながら、今後もこの「私たちの良心の砦」を死守し、平和を祈り、邁進していきたいと思います。

一九四六年福岡市生まれ。九州大学医学部卒。一九八四年パキスタンのペシャワールに赴任。現地ミッション病院で、ハンセン病コントロール計画を柱にしたアフガン難民の診療に携わる。一九八六年、JAMS（日本ーアフガン医療サービス）を設立、長期的展望に立ったアフガン無医地区での診療モデルを創設。現在JAMSは一つの病院と三つの診療所を設立し、アフガン人の無料診療に当たる。一九九四年、ハンセン病根絶のための病院PLS（ペシャワール・レプロシー・サービス）を設立、北西辺境州における本格的なハンセン病コントロール計画に着手し、病院に来ることのできない山岳地帯の患者への巡回診療と基地診療所の建設を行なう。一九九八年十月には恒久的基地病院PMS（ペシャワール会ジャパン医療サービス、七十床）を建設、十一月開院。PMS、JAMSの現地スタッフ計一三〇余名、年間無料診療数約十五万人。

●ワーカー通信

会計作業に四苦八苦の毎日です

PMS現地連絡員　藤井卓郎

ペシャワールの町は汚い。馬車から、というか、それを曳く馬がする糞が、いたる所に転がっているし、車の排気ガスは無浄化、無規制純正ガスである。昼間はあまり意識しないのだが、夕方から夜にかけて、大気の汚れをよく感じるときがある。

車に乗っていて、対向車のヘッドライトが霞んで見えたり、こちらのライトが届かなかったり……。今日は、歩いて買い物に行き、夕日の方角を目指して帰ってきたら、町のいいかげんの高さの所まで排気ガスの霧でとても綺麗だった。遠くが霞んで全然見えない。夕暮れの空のピンクと車のライトと街灯（スタッフハウスの方にはあるのです。一応町なかですから）、それから路沿いの店の看板などの色が混じり合い、絵画的な風景だった。

いつも食事は病院の給食だが、たまには汚い町を見ながら、テイッカカラーヒーなどを食べていると、向かいの客が席をたった。服は汚いが、白くて綺麗な顔をした少年が、ナンを漁っている。彼が私の食べ終わった鍋を指差している。私がうなずくと、もう何も残っていない鍋の底にたまった油をおかずにしてナンを食べ始めた。しばらくはチャトニーでナンを食べる私と差し向かいであった。

ところで最近は、会計の仕事専門になり、ひところのような忙しさはなくなったものの、コンピュータを導入しての会計作業に四苦八苦している毎日。こちらは雨が降らないので空気が乾き、風邪が大流行。私も一週間ひどい風邪から抜け出せず往生している。咳も出るので勘弁していただいて、筆を置こう。

▼青年よ来たれ！　雑務ボランティア募集▲

＊現地での買い出しからパソコンまで、何でも雑用がこなせる青年を募集します。但し、二ヶ月以上滞在可能なこと。現地までの費用は当人負担。滞在中の費用は不要。（七、八月は除く）

▼未使用の切手・ハガキを！▲

＊会報の発送費に、年間百万円以上がかかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。

表紙をめぐる小さな物語　20

水運び人足ハキム

甲斐大策

シャー・フラジ山の頂が、見る見る赤紫色に染まっていく。

頭上高く背負ったブタァ（寒冷地の矮小灌木）を左手で支え、一歩一歩急坂を下りながらハキムは低い声で唄っていた。

「……天国にゃ、苦しみはなく、幸すべてあり、……とはいうけれど、サンギィ天国水がない。あら、そこのサカオ（水運び）さん、お願いね……だと！　承知しました天国のカシャンギィ（別嬪）奥さま、地獄の水で良いのなら、……下の地獄にゃ水がある……ではひと担ぎ、アウ・ベバリ！」

カーブルにいた頃、ハキム達水運び人足が、坂道で喘ぎながら口ずさんでいた歌である。共同水道から水が汲める間は、世相の変化にかかわらず、五十キロはある皮の水袋を背に、ハキム達は、コルテ・サンギィの高処にある住宅地を仕事場としていた。十五年近い人足暮しはハキムを、ずんぐりと首の太い、いかにもサカオという体躯にしていた。

五年前、市内を走りまわりながら殺し合うハザラ同士の争いを見て、カーブルを去る決心をし、バーミヤーンへ戻った。谷の西、街道から丘二つを隔てた窪地の小洞穴に家族五人と生きてきた。それは神の御心、と信じている。

ムーシュ（野生のモルモット）の小さな影が暗がりに立っている。

「芋も小麦もたくわえた。ブタァも今年は充分、女房どの、文句はなかろう。」

独言しながらハキムは、ムーシュのように冬籠りしていればやがて春がくる、と考える。西も東も下界も、どこへいっても地獄だが、ブタァの山に隠れて誰の眼にもふれない洞穴で、家族と暖かく安全に生きてゆけるここは天国、と思うのだった。

※甲斐氏は一九三七年大連生まれ。著者に『神・泥・人』『アジア回廊』（石風社）などがある。

医師の間に活気が出てきました

PMS医師　小林　晃

一九九八年も終わりが近づいてきました。皆さんいかがお過ごしでしょうか。私の方は九月より単身赴任に終わりを告げ、妻と子供二人を連れてこちらにやってきました。幸い、妻も子供も病気をすることなく元気にしております。子どもたちは近くの外国人専用の保育園に行くようになりました。当初は言葉が分からず、三歳になる上の子は少し癇癪をおこしていましたが、今では他の国の子どもたちとも仲良く遊んでおり、ほっとしております。

日本では考えられないトラブル

さて、病院の方は長い準備期間を経て、十一月十日ようやく新病院へ移転しました。その間の中村先生を初めとするPMSのスタッフ及び陰で支える日本のペシャワール会の皆さんの苦労は筆舌に尽くしがたいものがあります。無事新病院への移転が終わりましたが、それからがまた大変で、医師、看護スタッフの教育、一部の患者への料金制実施、備品購入などのシステムの確立、院内における治安の確保、それぞれの部屋の鍵の管理、それにガス、水道、電気などの確認などやることは山積みです。

日本では考えられないことですが、たとえば日本で建物ができあがると電気、ガス、水道などが普通に働くのが当たり前ですが、こちらでは実際使ってみると、集中治療室で吸引チューブを使う際に電気のスイッチを入れてみると電気が来ていなかったり、ガスの圧が弱すぎてガスストーブが使えなかったり、窓がきっちり閉まらなかったりと、信じられないことがたくさんあり、要らぬ苦労が絶えません。また日本と違い治安の確保も重要で、病院の周りにはカラシニコフという銃を持った門衛が警備を始めました。

医者の仕事に戻れない……

これらの管理は日本の病院では事務長が行うのですが、こちらではなかなか信頼して任せられる人材がおらず、中村先生自らが陣頭に立って行なっており、なかなか医者の仕事に戻れないのが実情です。各部屋の鍵の管理一つにしても小学生に理解させるごとく何度も何度も徹底しなければうまく行きません。また電話一つ申請するのにも役所に何度も何度も足を運ばなければならず、なかなか仕事が進みません。

中村先生のこのような苦労もありましたが、病院は日に日にそれらしくなり、十一月二十日より初めての外来患者の受け入れが開始されました。初日は四十六人でしたが、二日目は八十人を越え、その後は百人をこえるようになり、この調子でいくと二百人近くになる

回診中の小林医師

のもすぐではないかと思います。

入院患者も、こちらから移ってくるときは、旧PMSからの引きつづいての患者が十六人だけでしたが、見る見るうちに患者が増え、今では四十人近くになりました。

患者が来てくれるのはありがたいことですが、こちらの受け入れ態勢がまだできておらず、看護スタッフの方も目の回る忙しさです。外来患者も様々で、もちろん今まで通り癲、遺伝性神経疾患などの身体障害患者の他にマラリア、アメーバ赤痢、結核、寄生虫疾患などの熱帯病、それに骨折、てんかん重積発作、尿管結石、肺炎などの、日本でもよく見られる疾患の患者もよくやってきます。

引っ越し作業中の小林医師（右）

こちらの医師は、知識は豊富な医師もいますが、正しく治療の経験を積んだ医師が少ないのが現状です。そのため、ほとんどの救急処置、骨折の処置などは、中村先生が管理の仕事で忙殺されているため、私が行なわなければなりません。それに腹部エコーの指導などもあり、一週間がすぐに過ぎてしまいます。

新米医師も四人合流

しかしながら、九月より新しい医師が四名入りました。この四人の医師は大学卒業後二年までの医師で、四十一人の希望者の中から試験と面接で選ばれた人たちです。そのためやる気のある優秀な医師ばかりですので、こちらも教えがいがあります。その一方でいろいろな質問をされるため、こちらも勉強しなければならず、うかうかしていられません。やはり新しい医者が入ると医師の間にも活気が出てきており、今回の新人医師採用は大成功であったと思われます。医師の勉強会、看護スタッフに対する勉強会も始まり、少しずつですが病院らしくなってきています。

さて、「貝は、殻だけでは貝とはいえない」という中村先生の言葉を借りれば、我々の病院は現在、貝殻がやっとできあがったところで、これから中身の充実を図っていかなければなりません。病院の質を上げるためには、病理、細菌などの検査の質を上げなければなりません。また来年には心エコー、胃内視鏡の導入も考えています。さらに、骨折などの整形外科疾患もたくさん出るためこの領域でのレベルを上げることも大切です。いい医療をし、受け入れ態勢ができれば患者はいくらでもやってくるものと思われます。

高度な指導は我々だけでは眼界があるために、近い将来、日本から短期間でもいいですから、それぞれの専門分野での指導に来てくれる人がいれば非常に助かります。来年には病院内に日本人のためのゲストルームもできる予定ですので、受け入れも可能になるかと思われます。

最後に、我々のスタッフハウスにコンピューターが導入され、電子メールのやりとりができるようになりました。メール番号は以下の通りです。皆様からのメールをお待ちしています。

pksh@psh.infolink.net.pk

小さくとも、具体的な蓄積こそ大事

PMS看護婦　藤田千代子

みな汗だくになって引越

いかがお過ごしでしょうか。ペシャワールは昼間は春の陽気ですが、朝晩は冷え込みます。ストーブなしに夜は過ごせません。

さて新病院は、十一月三日、中村先生の到着と共に、念願の移転が開始されました（四月の開院式の折りは、いろんな出来事が重なって建築が出来上がってなかったのは、ご記憶のことと思います。その後、日本と現地、双方のねばり強い努力でまあまあ移転が可能になったのは、実は十月も下旬になってからでした）。

しかし、建物さえできれば病院ができるという訳ではありません。引越と一口に言っても簡単なものではないし、八十名以上のスタッフを抱える本格的な病院組織にするのがまた一苦労です。引越の号令が出た十一月三日以来、てんやわんやの出来事の連続、仕事の山を前に、怒鳴ったり、がっかりしたり、喜んだり、あれから一体何日経ったのか、一日が一カ月のようでもあり、一カ月が一日のようでもあり、余りの忙しさに時間の感覚がマヒしてしまいます。

それでも、スタッフ一同待ち望んだ移転です。引越の三週間というもの、ドクターから掃除人まで、みな片手にモップ、片手に雑巾を持ち歩き、汗だくになって朝から晩まで働きました。やっと曲がりなりに外来がはじまったのがほんの一週間前のことでした。

巣を壊されたアリのように

何もかもが便利に運ぶ日本ではおそらく想像できないかもしれません。机や椅子などの備品の購入でさえ、一苦労です。例えば訓練生の入る寮の二段ベットなど、明日だ明後日だと言っているうちに二週間は優に経つのが普通で、その上とても使えない代物であったり、私が怒り狂っていたら実はそれが安心して任せたスタッフの注文通りだったり、気ぜわしい割に事が進まないのです。その上、建物がこれまでの借家住まいと違ってだだっ広く、部屋数が六十室以上、病院中を走り回って伝言したり、まるで巣を壊されたアリの塊のように右往左往する状態です（ちなみに、この事態を予想して活躍するはずだった内線電話の据えつけは、ほぼ引越が完了して外来が始まった後でした）。

こういうときは思わぬ事が起きるもので、引越が始まって十日目、私もあわてて転んで頭と右手を床にしたたかに叩きつけ、数日間、寝込んでしまいました。何が何やら分かりませんでしたが、神経病専門医でもある中村先

患者さんを看る藤田さん（吉田敬三氏撮影）

生によれば、「右前頭部打撲による脳震盪」だとのこと、我ながら自分のそそっかしさに不甲斐なく、イライラしながら休みを取りました。おまけに、「その日は大したことないが、何日かしてから痛みがもっとひどくなる」という見立て通り、翌日から数日間は筋肉痛で動けませんでした。

旧ＰＭＳ病院の中庭でくつろぐ患者さん（吉田敬三氏撮影）

さて、病院が始まっても、まるで小学生に劇の練習をさせるように、新しい組織を動かすため（といっても、日本では常識なのですが）、手取り足取り準備をさせなければなりません。当地では、口達者な割にまるで「チームワーク」や組織された動きはほとんど無いもののようで、そのために泣かされる毎日です。

中村先生がよく朝の訓示で、「議論はいいから、やれ。お喋り・言い訳は信じない。誠実な努力と結果だけ見る」とおっしゃることが、身に染みて同感です。

「これでも良くなったんだ！」

こうして、バタバタと毎日が過ぎていきます。でも、必ずしも悪いことばかりではないのです。ふと、数年前ミッション病院を出たときの事態を振り返りますと、これでも随分様になってきたものだと驚くことがあります。日本人や外国人が現地の状態を悪し様に言うと、逆に「これでも随分良くなったんだ」と言い返したくもなるのです。

嬉しかったのは、一番心配していたアフガン人とパキスタン人の争いがなく、逆に協力したり、かばいあったりする場面に出くわし、思わず心和むことがあることです。ＪＡＭＳのシャワリ先生が、不便な交通事情に対して、ＪＡＭＳ専用のミニバスをＰＭＳ病院にも来るように手配してくれました（病院が町の外れにあって、夜は治安が悪く、心配だったのです）。かつては犬猿の仲であったアフガン人・パキスタン人看護指導者たちも、よく協力しています。

昨日の仇敵、今日の友……？

まだ十七、八歳の看護訓練生の中に、アフガニスタンの山の中から来た、アブドゥッラー、パキスタンのスワト地方から来たファズレワヒッドという子がいます。二人とも若いのにらい腫型らいで治療を受けて完治し、そのまま病院で働いていました。それが互いに犬猿の仲、一度は喧嘩で停職処分になったこともありました。

今年、旧病院でアフガン人少女に対する嫌がらせ事件（日本で言うセクハラ）が発生、二名が退職処分になりました。田舎では殺傷沙汰の復讐の掟ですから、当然の厳罰に処せられたわけです。例のファズレワヒッドも嫌疑をかけられ、処分されました。しかし、その後無実であることが判明、職場復帰することになりました。

ところが、彼の無実を執拗に訴えて奔走したのが、喧嘩相手の筈だったアブドゥッラー。しかも殺人的に多忙なこの時期に、勤務の合

馬で巡回診療へ向かう藤田さんらPMSスタッフ

間をぬってやるのは容易なことではありませんでした。大方の者が自分のことで精一杯の折り、下手をすれば自分にも嫌疑がかかって処分されるかもしれません。私は、指導してきた責任者として大変嬉しく、彼の勇気と男気を大いに買いました。こんなことは数年前までは考えられなかったのです。

●ペシャワール訪問記

知識と現実のギャップを知った三カ月でした

東京大学国際地域保健学専攻　堤　敦朗

「バカだから続くんだ」

これが象徴するように、ただの美しいスローガンではなく、一見小さな出来事であっても、このような日々の具体的な蓄積が、少しずつ大きなことを成し遂げていくのではないかと、改めて思っている次第です。

「国境・人種・民族を超えて協力する」。確かに美しい信条です。問題は、善いこと、美しいことは、誰もが頭では頷いても、哀しいのは人の性、さて具体的な場面になると利己的な要求が顔を出してきます。実際、多くの国際団体がうんざりしながら現場を去っていきました。

「バカだから続くんだ。小利口者ばかりじゃ、世の中、面白くない。バカも世の中の味つけよ」と中村先生はぶっきらぼうに、どこ吹く風ですが、おそらく過去十五年、このようなことの連続だったのでしょう。「それでも……」と呼べるものは一体何なのでしょう。めまぐるしい毎日の中で、ふと考えるこの頃です。

皆様もお元気で。よいクリスマスとお正月をお迎えください。

「チニーバガエール！」

なんだここは。えらいところにきてしもうた。ペシャワール空港に降り立ったときの率直な感想です。重い雰囲気、圧迫感、それにほとんどの者がシャルワール・カミーズ（民族服）を着ているし、ほんと洒落にならん、と思ったものです。

しかし、慣れとはすごいもので、今となってはそのとき感じた圧迫感などはまったく感じなくなり、むしろ活気のあるバザールに行ってそこらの人と話すのが楽しく感じます。シャルワール・カミーズも着てみると気に入ってしまい、毎日のように着ています。ペシャワールには日本では見られなくなった人間臭さがいまだ健在であり、何か日本にいるときよりも人間的な生活をしているように感じたりもします。買い物をすればお茶を出してくれますし、そのお茶がまたおいしいのですが、ただ、異常に甘いのです。砂糖をたくさ

ん入れるのでいつも砂糖なしにしてもらって飲んでいます。ペシャワールにきて最初に覚えた言葉はアッサラーマレイコムで、次がチニーバガエール（砂糖なし）です。その次覚えたのが、カーナー（食事）です。ご飯もおいしいです。とはいってもやはり貧しい国です。物乞いもいたるところにいてどう対処すべきかわかりませんでしたし、子どもたちが働いている様は少し私を辛くします。

引っ越し作業中のPMSスタッフたち

現場を知らぬことに危惧

さて、今回私が無理を承知でペシャワールに滞在させていただいているのは途上国の医療について勉強させていただくためです。来年の四月から大学院への進学が内定し、そこで途上国の医療について学ぶ自分が現場を知らず、机上の研究に終始してしまう事を危惧したためです。実際にこの場に来てみると本で勉強したことも現場のほんの一部に過ぎず、このまま現場を見ずに研究していたらと思うとぞっとします。中村先生を初めとするスタッフの多忙ぶりを目の当たりにすると、今まで勉強してきたことと現場とのギャップに差を感じずにいられません。一筋縄ではいかないのが現実で、病院施設にしても、スタッフの教育にしても、まだ問題は山積みのようで中村先生は睡眠不足のようです。

今回の滞在中には新病院への引越など歴史的といっても過言ではない時期に手伝わせていただき、今後数十年の拠点となる瞬間を経験できてうれしく思います。

私は今回の滞在では何もできなかったのが事実です。そして一人では何もできないと感じています。日本にいると途上国に対して何をしてあげられるのかという事を考えてきましたが、その考えは間違いである事に気づくのに時間はかかりませんでした。できるのは共に歩むことです。共に歩むために何をすべきなのか、何ができるのか、これからこのことを考えていきたいと思っています。

最後に、私的な事情にもかかわらず、私を受け入れて下さったペシャワール会の皆様とスタッフの方々に感謝の意を述べさせて頂きたいと思います。本当に有り難うございました。

●毎号、会報の表紙画と「表紙をめぐる小さな物語」を描いていただいている**甲斐大策氏**の最新刊が石風社より刊行されました。タイトルは**『餃子ロード』**です。

甲斐氏は一九三七年、旧満洲・大連生まれ。一九六〇年代からほぼ毎年アフガニスタンを訪れ、画家として、また作家としてこれまで作品を発表しておられます。本書は旧満州からウィグル、アフガンまで、三十年以上にわたりアジアの乾燥地帯を旅しつづける甲斐氏の、餃子をめぐる紀行です。食を通して各地の民衆の生活の有り様が熱く伝わってくる一冊です。ご希望の方はペシャワール会まで、振込票にて、**餃子ロード希望**と明記の上**一八〇〇円＋送料二五〇円**をお振り込み頂ければお送りいたします。売り上げの一部は会の事業収入となります。

●事務局だより

＊ようやく新病院での診療が開始されました。

中村医師の話では、引越しから診療開始までまさに修羅場だったようです。これまでもバブル崩壊後の荒海の航海を余儀なくされましたが、いよいよ本格的な船出です。皆さまのご協力に感謝すると共に、より一層のご支援をお願いいたします。

＊今年は会に関するテレビ番組が三本放映されました。なかでもNHK／BSで放送された現地ドキュメント「癒しのキャラバン果てしなく」は観た方からの反響も多く、十二月二一日夜一一時からは再々放映（BS1）があります。また、十一月二五日の読売新聞「編集手帳」に新病院の開院と苦境が紹介され、百本を越える寄付申出の電話がありました。

世の中の出口の見えない不況を考えると、不思議な気もします。しかし、人々が消費行動では満たされないものを、私たちの活動に託そうとされていることを強く実感します。たびたび申しあげますが、当会の会員も寄付もバブル崩壊後に顕著に増えているのです。いわゆる「国際化ブーム」はバブルの産物ですが、NGO活動はバブル崩壊後にクローズアップされたことを銘記すべきでしょう。

最近の世相を観ると、将来の不安をかき立てながら、お金を使え！と絶叫しているように見えます。「清貧の思想」なるものがもて囃された時期があります。今では、これもバブル経済とセットだったことがよくわかります。

来年は一九九九年、良い年でありますように。

●ペシャワール会ハンセン病院建設基金
郵便振替　〇一七三〇―九―三二四二一

㋑村から

今年も本年最後の会報を発送する季節となりました。毎年、この時期になるとペシャワール会事務局でひとつのことが話題になります。それは忘年会を兼ねた年末恒例の事務局スタッフによる「もちつき」会のことです。例年、もちつきの場所設定から道具の確保や日程調整まで〝もちつき担当〟と事務局の皆から期待された某スタッフがねじりはちまきで準備をし、「もちつき」をしてきました。今年は未曾有の不景気で何かと暗い話題の多い年でしたが、いつもの師走と同じように酒を酌み交わし現地スタッフに送る雑煮の餅をついて、良くのびるつきたての餅のように粘り強い活動を共に来年も続けて行けたらと思います。（末）

ダラエ・ヌールへの道
――アフガン難民とともに
中村哲　四六判上製三二六頁　本体二〇〇〇円
ひとりの日本人医師が、現地との軋轢、日本人ボランティアの挫折、自らの内面の検証等、血の噴き出す苦闘を通して、ニッポンとは何か、「国際化」とは何か、を根底的に問い直す渾身のメッセージ
石風社　福岡市中央区大手門一―八―八　電話〇九二（七一四）四八三八

ペシャワールにて［増補版］
中村哲　四六判上製二六〇頁　本体二〇〇〇円
石風社　福岡市中央区大手門一―八―八　電話〇九二（七一四）四八三八

アフガニスタンの診療所から
中村哲　B6判並製二〇〇頁　本体一〇六八円
筑摩書房　東京都台東区蔵前二―六―四　電話〇三（五六八七）二六七〇

会則

①本会の名称をペシャワール会とする。

②本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行うことを目的とする。

③本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。

④会員は一口年額三、〇〇〇円以上、学生会員一口一、〇〇〇円以上、特別会員一口一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。

⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。

⑥本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。

⑦本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。

役員の改選は毎年総会にて行う。

⑧毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。

⑨本会の事務局をFARA HOUSE（〒八一〇　福岡市中央区大名一丁目一〇―二五　上村第二ビル三〇七号　☎七三一―二三七二）内におく。

発行所●ペシャワール会　〒810 福岡市中央区大名1丁目10-25 上村第2ビル307号　毎週水曜日夜七時より例会（参加自由）
☎（092）731-2372　郵便振替 01790-7-6559　〔分室〕☎・FAX（092）725-3440（石風社内）
発行日　1998年12月16日　No.58　会長 高松勇雄　現地代表 中村 哲　事務局長 村上 優　名誉会長 問田直幹